
清成学園物語 2 GWのミラクル

ビーシア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

清成学園物語2 GWのミラクル

【Nコード】

N3382Y

【作者名】

ビーシア

【あらすじ】

清成学園シリーズ2弾。

全寮制お嬢様学校「清成学園」高等部に通う森口美由はゴールディンウイークGW休暇のひかるこ為に実家に帰省すると、そこには従妹の光子が美由を待っていた。

(前書き)

清成学園シリーズ2弾。

「ただいま」

玄関に入ってきたきれいに並んだ一足の靴を見て、今帰ってきたばかりであるのに学校へ引き返したくなかった。

私が通う清成学園中等部指定のローファー。私以外で清成に通っているのは従妹の光子^{ひかるこ}だけ。

いかにもお嬢様のな外見と性格　つまり超がつく程我が儘　この従妹が私は昔から苦手だ。

良く磨かれた長い廊下からお手伝いの幸さんが「お帰りなさいませ、お嬢様」と手を伸ばしてくる。荷物を渡しながらもう一度「ただいま」

「母さんは？」

「お買い物に出かけられています。それと先程から光子様がお待ちになっていきますよ」

「……………また無理難題でも持ってきたかな」

ため息交じりで言うと言と幸さんは苦笑いしながら

「さあ、どうでしょう。ご機嫌はよろしそうですね」

この従妹の光子、清成学園中等部3年生なのだが我が高等部のアイドルこと北条蓮の大ファンであり、非公認ながらファンクラブまで作っている。

今までに、北条蓮の使用しているシャープペンがほしいのだ、使っているシャンプーメーカーを調べるのだ、香水も銘柄を聞き出せだの、あらゆる「北条蓮情報」をねだってきた。

もちろん犯罪行為や校則違反になりそうな行為は必死に止めてきたが、困るものは困るのである。

「光子は私の部屋？」

「はい」

「あとで濃い緑茶を持ってきてもらえるかな。あとなにかお腹に入

れるものを」

私がイライラしたときに良く濃すぎるほどの濃い緑茶を飲むのを知っている幸さん。今から下準備をしようとする私に更に笑顔になった。

「かしこまりました。緑茶と一緒に和菓子をお持ち致します」

一礼して台所に消える。

その背中を見送りながら、もう一度大きなため息をついて気合を入れる。

今日は一体どんな「お姉さま光子お願いがございますの」がくることか……。

自分の部屋に行くのに、足が重い。

「お帰りなさいませ、お姉さま」

ソファーにちょこんと座って光子は待っていた。小さく頭を下げる。

「ただいま。で？今日は何のようなの？」

早くくつろぎたい。そんな気持ちで遠慮なしに言葉尻に出てしま

う。
「まあ、お姉さまつたらひどいわ。光子はお姉さまにお会いしたくて2時間も待つていたのに」

色の白い頬を膨らませて、拗ねる。

それを指で突っつきながら「ごめん」と形だけ謝る。単純な光子はこれだけで機嫌をよくするだろう。

案の定「許して差し上げます」と微笑む。

「それで？改めて聞くけど今日はどうしたの？」

光子と向かい合わせる形でクッションに座る。

「光子、お姉さまにたつてのお願いがありましたとお疲れだとはおもったのですけれど、もう光子はいてもたってもいらねずにこうして来てしまいました」

光子はじらすように、ゆっくりと紅茶を飲む。

さつさと用件を聞いて済ませたい私にはそんな態度はイライラするだけだった。下手に機嫌を損ねるとややこしいことになるので待つしかない。

カップをソーサーに戻し、ハンカチで口元を押さえる。

もう質問をしなおしても機嫌を損ねないだろうと、再び口をあけると部屋のドアをノックする音。

出鼻をくじかれ更にイラッとしたがおそらく幸さんがお茶を持ってきたくれたんだろう。

ドアを開けると幸さんがトレイを持って立っていた。

「お話中失礼致します」

トレイには湯のみに入ったお茶と和食器にのった和菓子。それと光子用に紅茶のポット一式。

「重かったでしょ？ありがとう。後は私がやるから大丈夫だよ」

幸さんからトレイを受け取ってドアを閉めようとすると、光子が「あら」と声を上げる。

「幸さん、私に紅茶と和菓子を一緒に食べると言うのかしら」
遠慮のないわがままな言葉。

光子の言葉に幸さんが萎縮する。慌てて光子用のお菓子を取りに行こうとするのを引き止めた。

「光子にはもうケーキがあるじゃない。ここはいいから幸さんは戻って」

光子に謝罪を言う幸さんを半ば無理やりに一階に送り出した。

トレイを乱暴にテーブルに置く。

食器の触れ合う音に、いらだつ感情を表現してみたけれど光子はお構いなし。

「光子、我が儘をいい加減に……」

「そんなことよりも、お願い聞いてくださいますか？」

「そんなこつとって、光子」

私の小言を遮るようにジーと私の顔を見る。

「お願いというのは他でもない蓮様のことです。今年の蓮様の同

室の方のことを教えていただけます？」

「なんで？」

「それはもちろん蓮様をお守りするためですわ。同室の方が蓮様に相応しいかたなのかを教えてください」

「……知ってどうするの？」

「相応しくないと判断した場合は、学校側に寮の部屋替えの要求をファンクラブ一同で出させていただくつもりですわ」

「……なんだよ、それ」

「ファンクラブの会長として当然の権利です」

悪びることなく言う。

怒りを通り越して呆れる。

「光子は本当にそれが当然だと思っているの？」

「もちろんですわ、お姉さま」

私が腹を立てていることに気づきもせず「なにか問題でも？」と首をかしげる。

「……レンの今年の同室の子は、私の親友だよ」

「親友」を強調して、暗に「私の大事な友人だからこれ以上馬鹿なことを言うな」とサインを送る。

つもりだった。

だが「親友」と聞いて反省するどころか、更に目を輝かせた。

「まあそうでしたの。ではお姉さまはその方をよくご存知ですね。どうですか？お姉さまから見るとその方は蓮様に相応しい方ですか？相応しくない方ですか？」

その質問には答えずに

「ねえ、私も一つ光子に聞きたいのだけど」

質問に答えてもらえず明らかに不機嫌になりながらも「なんですの？」

「光子からみてどんな人がレンに相応しいと思うの？」

あまりの怒りに自然と声が低くなる。

いつもの光子であれば、流石に理由はわからずとも私が怒ってい

ることに気がつくのだが、「蓮様の同室の方がお姉さまの親友」にすっかり舞い上がっていて気がつかない。

気がつかないまま夢見るような顔で答える。

「そうですね。蓮様は完璧なお方ですから、やはり同室の方も完璧な方でないといけませんわね。勉強にすぐれていて……」

「文武両道つてやつ？」

「それですわ！あとは家柄も良くて……」

「……もういい。光子が言いたいことはわかった」

「それじゃ……」

「でも、教えないし教えたくない」

話はもう終わりと光子に背を向けて、制服から部屋着に着替え始める。

無言の「帰れ」命令。

「お姉さまったら、ひどいつ」

背中にクッションを投げつけられる。

その軽い衝撃に切れた。

完全に切れた。

「ひどいのはどっち？」

私はスリップ姿のまま、光子に近づき思いつきり両手を握り締めると、光子の身体がビクツと震えた。

「お姉さま、手が痛いわ」

「ひどいのはお前だよ。あいつを知らないお前がなんで勝手に判断するんだよ。お前は一人人の何を見ているの？表面だけしか見れないお前に人を批判できるわけ？何様なんだよ、どんだけ偉いんだよお前は」

光子の瞳から涙が流れる。

でも怒りで頭に血が上った私はおかまいなしに捲くし立てる。

「そんなくだらないお前のものさしで、私の大事な友達にあれこれ言ってもらいたくわないね」

手を離すと光子は顔を覆って泣き始めた。

私は構わず着替えを再開する。

やがて泣き声を聞きつけて、幸さんが遠慮がちに廊下から声をかける。

丁度いい。

まだ泣き止まない光子を力ずくで立たせ、ドアを開け廊下に追いつ出す。

「私が何でここまで怒っているのか、それがわかるまで私には会いにくるな」

そのまま乱暴にドアを閉める。廊下では更に激しく声を上げて泣く光子と必死に慰める幸さんの声。

かわいそうだけれども、こうでもしないと光子にはわからない。

人の価値はそんな表面的なものでは計れないことや、計ってはいけないこと。それがわからなければそのうちもつとつらい思いをする。

遠くなる泣き声に「ごめん」と一人呟いた。

「光子が家出？」

朝母親にたたき起こされ聞かされた言葉に、飛び起きた。

寝不足の頭に「家出」がぐるぐると回る。

スリッパを履いてそのまま洗面所へ。顔でも洗えば少しは頭が働く。

一緒についてきた母親は心配顔で話を続ける。

「そうなのよ。なんでもね昨日夜早くに自室で休んでいたらしいの。具合でも悪いんじゃないかと心配になって朝様子を見に行ったら、部屋にはいなかったそうよ」

冷たすぎる水に一瞬ヒヤツとする。

「それがね。家中を探していたら手紙が見つかったの。『謝りに行って来ます』って、書かれていたそうよ」

タオルを手渡しながら「朝からパニックよ」

謝りに？私に会いにきたの？

もしそうなら、昨日の夜のうちに私に会いに来ているはず。

昨日は朝方まで起きていたけど、光子は来ていない。

それとも途中でなにかあった？

「・・・・・・・・探してくる」

「美由どこか心当たりでもあるの？」

「ない」

部屋に戻り、お財布と携帯電話をバックに入れ、廊下を玄関まで走る。

「今お兄ちゃんが中等部へ探しに行っているわ。叔父さんと叔母さんは同級生に電話して聞きに回っているはずよ」

スニーカーの靴紐を縛る。焦ってうまく結べないのを母親がわかりに結んでくれる。

「雨降りそうだから、念のために傘を持って行ってね」

「うん」

傘たてから傘を2本手に取る。

「何かわかったら電話頂戴」

「いつてらっしゃい。気をつけてね」

母親の言葉を背中であきながら、走り出す。

光子どこ？どこへ行ったの？

近所の公園、ネットカフェやスーパー。

とりあえず目のつく場所すべてを探した。

名前を大声で叫んで、走り回った。

やがて夕方近くになると雨が降りだすけれど、いつの間にかどこかへなくしてしまえば濡れだった。

吐く息が白い。寒気までする。

でも探すのを止められない。

でもどこにもいない。

見つからない。

もうすぐ暗くなる。

ああ見てて怖がりな光子だから怯えているはずだ。
探さなくっちゃ。

走りすぎて震える膝に喝を入れて、もう一度走り出そうとしたとき、携帯電話が鳴った。

「まあまあ、こんなに濡れてしまって。お風呂の用意はできていますから、先にそちらへ。そのままではお風邪を引いてしまいます」
玄関先で待っていた幸さんにバスタオルをもらって、いい加減に髪を拭く。

「光子は？」

「はい、先程」

頷き、チラッと応接間を見る。

「……………お風呂は後でいい」

濡れたバスタオルを幸さんに返し、そのままスリッパも履かずに応接間へ向かう。

濡れた靴下がピチャピチャいって、気持ち悪い。途中で靴下を脱ぎ捨てた。

「光子！！」

音を立てて重厚なドアを開けると、光子が座っているソファーから慌てて腰を上げた。

「お姉さま……………私」

私は光子に詰め寄ると、思いつきり頬をひっぱたいた。
そして力いっぱい抱きしめる。

「どこに行っていたのよ。心配したのよ」

「お姉さま……………ごめんなさい」

わんわんと泣き出す。

もっと安心したくてきつく抱きしめる。

と、遠慮がちに声がかかる。

「無事に送り届けたから、そろそろ私たちは失礼するよ」

光子が無事に帰ってきてほつとしていてすっかり忘れていた。光子をここまで送り届けてくれた親切な人にお礼を言わなければ……。

「……なんでここにいるの？」

私の質問にカオリとレンは顔を見合わせて笑った。

「あの実はね……」

光子が謝りに行ったのは、私のところではなくカオリにだった。緊張しながらもレンの自宅に電話をかけると、学校の寮にいと教わりそのまま最終の電車で高等部の寮へ向かったらしい。

そして部屋の番号を知らない光子は一つ一つの部屋をノックしに歩き回った。

やっとカオリとレンの部屋を見つけたときには、熱が出てフラフラだったらしい。

熱で真っ赤な顔しながらも二人に事情を説明してカオリにもレンにも謝罪をし、帰ろうとしたところ倒れた。

倒れた光子を交代で看病をし、熱が下がるも心配だからとこうして私の家までついてきてくれた。

そんな二人に私は丁寧にお礼を言った。

そして8時ごろになり、光子の両親がぜひ二人にお礼が言いたいと、ワインと料理を持って尋ねてきて、急遽お食事会になった。

夕飯を済ませ、まだ電車があるからと帰ろうとする二人を引き止め、結局今晚ここに泊まる事になった。

ゲストルームが2つ用意された時「ごめんね。気が利かなくて」とからかうと、レンに小突かれ、カオリには足を踏まれた。

お酒が進みまだ賑わう大人には付き合いきれないと、さっさと自室にいくと、光子がついてきた。

どうしても私と一緒に寝たいらしい。

いつも道理の我が儘っぷりに迷惑に思うよりも安心した方が強く、今夜だけと、特別に許した。

カオリとレンはさっさとそれぞれの部屋で寝ている。

私のパジャマを少しブカブカに着て、キョロキョロと落ち着きなく部屋を見回している。

「なあに？緊張でもしているの？」

明日あの二人をお礼がてら、どこかへ連れて行ってあげよう。

目覚まし時計をセットする。

「……………こうやってお姉さまの家にお泊りするの、久しぶりです」

「そうだね」

光子用の枕にカバーをかけている。 おっと！

「……………光子？」

更にきつく背中に抱きつく腕がきつくなる。

「どうしたの？」

背中が濡れてきた。

「……………光子」

「……………このままでいさせてください。少しでもいいから。

……………これが光子の最後の我が儘です」

鼻声がかわいいと思ってしまった。

なので

「わかった。……………少しだけね」

と、許してしまう。

光子を必死に探している間中、自分の中にあつた感情の変化。

いまこうしているのがひどく心地がいい。抱きつく光子を少しだ

け愛おしく思ってしまう。

これはつまり。

そういうことなんだろうか？

はて？

ともあれ、それぞれの夜が更けるのであった。

(後書き)

清成学園シリーズの第2弾です。
今回はサブキャラの美由さんのお話。

この二人どうなるんでしょうか。
いちおう美由さんには彼氏様がいらっしやるし、光子は相変わらず
わがままっぷりを発揮しそっだし。
なによりも。

光子の我が儘っぷり、あまり好かれそうにもない。

実はですね。

この小説を投稿するの2回目なんです。

本当はしばらく前に投稿したのですが、なぜかその投稿が反映され
ていない！

念のために2、3日待ってみたのですが、反映されない！

反映されるまで待つべきか、あるいはもう一度書いて投稿するかと
悩みました。

一度投稿が反映されないと、またそうなたらどうしようか・・・
・と怖くなります。

どうかどうかこれは反映してくれませうように。

あとあと、感想などいただけると書いている人がとても喜びます。

ぜひぜひ、一言でもかまわないので「読んでみたぞ」と感想をくだ
さい。

さて今回はメインキャラにもどりまして、GW明けの話になります。
そしてちょっと長いです。

長いといってもちょっとだけですので、安心してくださいなね。

それでは次回（次回あるのか？）お会いしましょう。
読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3382y/>

清成学園物語2 GWのミラクル

2011年11月8日02時08分発行